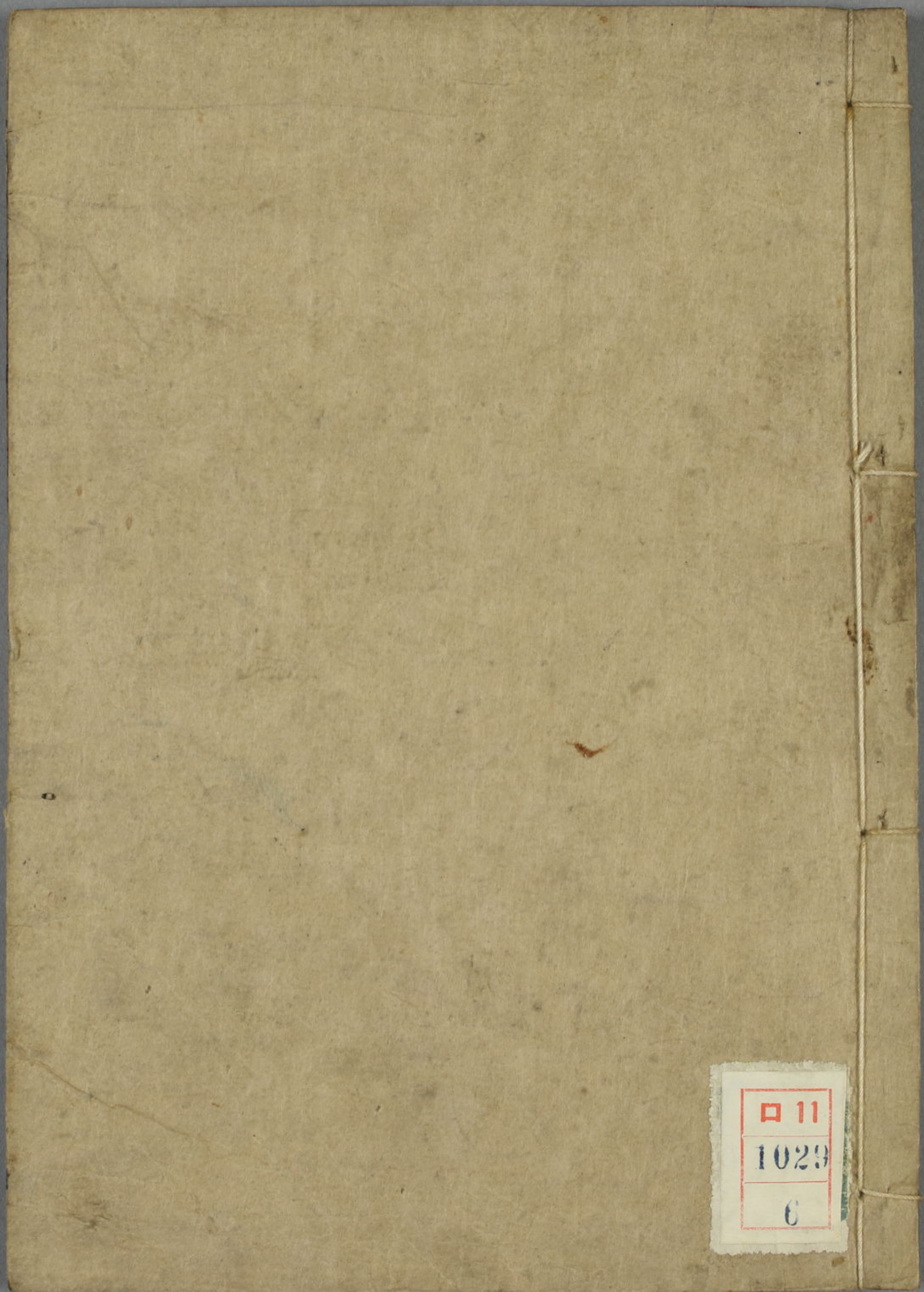




□ 11
1029
6



孟子朱喜集註

梁惠王章句上

孟子梁の恵王と見王の曰く夏千里と遠しとせしめて來る亦將より以て吾國と利するも有んと将乎
孟子對て曰く王何ぞ必らず利と曰く亦仁義有而已

王ハ何を以て吾國を利せんと曰大

孟子朱喜集註

梁惠王章句上

惠王ハ魏の國の君として自ら僭て王と稱するの此時天下

亂れて天朝の天正年中の如く諸侯伯天下を望みけり此時賢者名將のよきとある者惠王より敬ひ召寄らる

孟子見梁惠王王曰夏不遠千里而來

亦將有以利吾國乎

孟子始めて梁へ至りて曰く夏

今千里を不遠せで來臨ありて定て妙計ありて吾國を勝利する事を巧みと有となす

孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已

矣孟子の對するは利欲と云ふ者ハ人の君として上りて立

王曰何以利吾國大夫曰何以利吾家

夫何を以て吾
家と利せんといふ士
庶人何を以て吾
身と利せんといふ上
下交利を征て國
危
萬乗之國其君と
弑する者必らば
千乗之家千乗
之國其君と弑する
者必らば百乗之
家千取百馬不為
不多矣苟為後義而
先利不奪不饜

士庶人曰何以利吾身上下交征利而國危矣
此段ハ利欲心の害ある所以を説きしる上と學士
下を士と若や王の御心何ぞして他國と亡
土地を廣んと欲する其大夫たる者も又何ぞ家の勢と利せん
りといふも又其一家中の王と百姓庶人は至らば何ぞ
身分の利を為と欲するや上も下も交り利欲心を胸に
挾て相逢する義理と輕に父子兄弟の同心を置きて國危といふめ
萬乗之國弑其君者必千乗之家千乗
之國弑其君者必百乗之家萬取千馬
千取百馬不為不多矣苟為後義而先
利不奪不饜
天下を望むの必らば萬乗の君を弑し奉る人も千乗
ぐの諸侯と千乗の君を弑し奉る人も千乗の君を弑し奉る人も千乗
利を先と為と欲する者も千乗の君を弑し奉る人も千乗の君を弑し奉る人も千乗
利を先と為と欲する者も千乗の君を弑し奉る人も千乗の君を弑し奉る人も千乗

未だ仁を以て而
其親を遺す
者有未未と義
を後する者有
未
王も亦仁義と曰
人何ぞ必らば
利と曰

有義而後其君者也
然るに今日道を重むる者ハ
仁義を語べし利を耻べし
事あるや鄙く譬バ仁とハ義とハ重むる道と
其の故に仁ある者の親の事を忘るは未だ例有る義を
抱ふ人の君の事を後とせし
その例未だ有らざる
王亦曰仁義而已矣
何必曰利
孟子再びのりてハ深く戒めぬ人
君する者若利心を抱ふハ國家万民を
不仁を抱く是を深く恐るハ孟子七卷の中意深く理の高
と多し其覚るも然るに此一段卷の第一番ハ載置といふ
殊に深意有と意味べしと道春先生
及東涯子も丁寧のなり

○孟子見梁惠王立於沼上顧鴻鴈麋鹿曰賢者亦樂此乎
又或曰惠王花園沼の
雁又ハ麋たる鹿さの戯さあそび居を遊覧ありて孟子へ問ふぞ
曰く賢者も亦その事と樂み致さんや
孟子對曰賢者而後樂此不賢者雖有此不樂也
孟子の御答ハ眞物を楽しむといハ賢徳ある者の事なり不徳不賢なる者ハよーケ様の品
ありと雖も樂むと能ハむとたなり
詩云經始靈臺經之營之庶民攻之不日成之經始勿亟庶民
此段ハ徳有人の樂ハ眞の樂する所以を説く是詩ハ詩經の中ハ文王の臺を經營めめて文王も樂とめ
子來
國民の者も有難かりとの義なり臺物見たり此詩の心ハ文王心の内ハ臺を經始ありて經營ありと然るに庶民

百姓あれを聞て有難君なりとて多くの民ども群集ふて之を
攻めたり其時文王より御をみ仰出され有て曰く必意思付
直なり必む亟經營せよと思ふ事勿とまり然ども親の事を子の
爲に如く来て遂に不日に出来有とや

右臺出来の上文王遊覧の場へ在りて遊覧する麀鹿或ハ伏又ハ戯居てい何も濯く肥る白鳥鴨等ハ毛色鶴やうき体なり又沼の上を覧るハ魚物く躍遊てゆるその文華なる景色をみて文王の徳の形容をのべ詞なり

文王以民力爲臺爲沼而民歡樂

之謂其臺曰靈臺謂其沼曰靈沼樂其

有麀鹿魚鼈古之人與民偕樂故能

樂也

上ハ詩の詞なり是より孟子詩の心を述りて其の如く文王といふも民の力に依りて臺沼園を經營する同事

たり然れども其下の庶民歡たのむ者ハ是常仁を施する民の憂る事ハ憂るのみ又王の樂を偕は樂といふ者なり麋鹿魚鼈も同義なり鼈ハくめ入臺臺臺沼園といふ餘は早く盡み出来たる園沼といふ義を名付くるものなり

湯誓曰時日害喪予及女偕亡民欲與

之偕亡此段ハ又不徳無道なる者ハ樂む事能はざるを述るなり即ち書經より湯王兵を率て桀王を亡しつゝ時

万民ハ誓ひを以て湯誓といふ是時桀王惡逆長じて我を讓人へ向て曰く我天子の身なれば日月と齊きなり時日輪害乃時々消春人や日の消失する時ありバ偕は亡するにあらずや女とは日を指していつなり然るに之を傳聞て万民うろと怒て曰く大に勿体なく日輪を共桀王の亡るゝとかなんは昔いかゞ之と與偕に亡と欲するなりと

雖有臺池鳥獸豈能獨樂哉

臺池鳥獸有と雖も豈能獨と樂さん哉

若くは民の恨怒を得ハ臺池ありて鳥獸の詠めありと雖も獨樂むと能はざらん

○梁惠王曰寡人之於國也盡心焉耳

矣河内山則移其民於河東移其粟於

河内河東山亦然ある時惠王の曰く寡人の國を治るに於てハ心のよりと盡用する事なり

領地の内より譬ハ河内の土地より四年饑饉する人飢く其河内の民を物入大儀とて河東へ住居を移し河東のよく

出来の米粟を河内へ運移して民を救ふなり又河東四年の時も亦然なり寡人と云ふは徳寡と人の心より卑下れ

詞なり 察鄰國之政無如寡人之用心者

鄰國之民不加少寡人之民不加多何

也極鄰國の政道を察し寡人の如く心を用心せ然るも鄰國の民百姓加ふ少といふ事なく寡人の民多しと多くなり得

梁の惠王の曰く寡人之國は於る心を盡し耳河内山を移し其民を河東に移し其粟を河内に移し河東山も亦然

鄰國之政を察し寡人の心を用ひ如くする者無鄰國之民少からんと加へ不寡人之民多しと加へ不何

五畝之宅之樹桑以之五
 十者以之帛
 可百畝之田其時
 之畜其時失
 者以之肉
 可百畝之田其時
 之畜其時失
 者以之肉
 可百畝之田其時
 之畜其時失

五畝之宅樹之以桑五十者可以衣
 帛矣雞豚狗彘之畜無失其時七十者
 可以食肉矣百畝之田勿奪其時數口
 之家可以無飢矣謹庠序之教申之以
 孝悌之義頒白者不負戴於道路矣七
 十者衣帛食肉黎民不飢不寒然而不
 王者未之有也

黎民飢不寒不
 然一王之不
 者未之有未
 狗彘人之食也食
 有之知塗有餓
 有之知塗有餓
 有之知塗有餓
 有之知塗有餓

此段時代の制法を以て論じ農民一軒の受作地五畝を半ハ田地
 半ハ宅に属し田地の内ハ木を種み五穀を害さず因て居宅の
 墻下に桑の木と樹なり然バ五十位ふる老人ハ帛を衣て寒さ
 事ハ一ト扱家ハ養雞豚狗彘の類ハ腹飽を取じ時節を
 失はば肉食とされ七十位の老人の養ふ事欠け扱一軒の
 世渡ハ百畝あり農作の時節を失ふとバ八九人数の口と養
 とも飢と有キト其上不庠序ふて聖賢の教を謹と示して
 又ハ説示うちハ孝悌の義をア弊ハ重く説ハ人々道と悟
 得バ仁政法度の政道ハ頒白の者ハ道を歩ふ道中
 心勞なる荷物ハ省ハ負ハ頭ハ戴ハさるやうに多ク七十の者
 ハ帛肉食の養出來て黎民不飢寒さるやうに多ク
 一王天下ハ王者と云ふれざる者未タ有リト云フ

刺人而殺之曰非我也兵也王無罪歲

狗彘食人食而不知檢塗有餓莩而不

知發人死則曰非我也歲也是何異於

刺人而殺之曰非我也兵也王無罪歲

狗彘食人食而不知檢塗有餓莩而不

知發人死則曰非我也歲也是何異於

刺人而殺之曰非我也兵也王無罪歲

狗彘食人食而不知檢塗有餓莩而不

知發人死則曰非我也歲也是何異於

斯天下之民至焉

今時ハ君ある人皆合戰を好み他國を奪ふこと行ひ奢りて欲を
繼ぐ一拘彘をよく養ふ其味と極て却て万民を惠と
を致さず是拘彘人の食と與食せしめて人を飢えといふ者
なり誠は分と知と檢とをさういふなり者なり且塗側は
饑草あまたる徒倉小糧米ハ貯る是を發て施すと云ふは
さう小人死する時ハ口給をさうて曰く我所為ハあつと歳
饑饉ゆくなりといふ譬ハ人を刺殺て我ハ非れ兵刃は為なり
曰小異なり今惠王ハ此理を悟て罪と凶歳は訛なりと勿
斯ハ天下の民帰服のころ

梁惠王曰寡人願安承教

此段ハ惠王上の意を受けての詞なり寡人願ふ心を安置て
教を承べし憚りと委曲を示めんとする

孟子對曰殺人以挺與亦有以異乎曰

無以異也聞いて説きあふ今人の命と取は挺とて

以刃與政有以異乎曰無以

異也これ同刃の理なり孟子の問王の對する下の説を述

曰庖有肥肉廐有肥馬民

有飢色野有餓莩此率獸而食人也

孟子明く説く右人の命と失ふは於てハ挺刃政との三ツ

庖廚ハ狗彘の美味肥肉あり廐ハ物入る弊をなす肥馬

あり然る民百姓ハ飢人餓莩あるハ譬ハ右の狗彘又肥馬と率

來て民を食物よりしたる獸相食且人惡之爲

民父母行政不免於率獸而食人惡在

獸相食且人之惡
惡民の父母と
為て政と行ひ
獸を率て人を

曰庖有肥肉廐有
廐ハ肥馬有民
飢色有野餓
莩有此獸と率
て人を食しむ

有乎曰以て異
有乎曰以て異
有乎曰以て異

異と云ふは

孟子對て曰く人
殺て挺と刃與と
以てセバ以て異

梁の惠王の曰く
寡人願くハ安ん
トて教へを承ん

食之而不免其死
不惡之其民
の父母と為る在
仲尼の曰く始て
備を作る者其
後金る乎其人
象とて之を
用るが為る

之を如何に其斯
民を以て飢て死
使

其爲民父母也

相食合と死人く傍るを見て退ぬ

方と惡ハ人情を率來て人を餌食とするの理を免ざる者あり

仲尼曰始作俑者其無後

乎爲其象人而用之也

孟子猶聖人の語とて説ふかの俑といふ者を

仕物者ハ身の罪によつて其後ハ絶えざる乎と云ふハ田
鏡後ハ用る人形なり古ハ人を葬ふ草人形と爲て死人の從衛と
いふを是古礼なり世次第に委くかゝる俑を用ふことなり
ぬ聖人こそと不仁なりと惡むハ機如く後世の惡王自巳死
るの時召遺愛する処の男子美女を全體に埋ふことなり
是を以て聖人其人は象の委を惡むの義なり今
江都殉死を禁むる毎益なることなりとの事誠は御仁德
よく聖人と同ト意旨なり

如之何其使斯民飢而死也

聖人の意右の如く況や民の父母たる其身にして坐して死さ
むと忍べやと云ふ仲尼ハ大宜王の御字なり

梁惠王曰晉國天下莫強焉叟之

所知也及寡人之身東敗於齊長子死

焉西喪地於秦七百里南辱於楚寡人

恥之願比死者一洒之如之何則可

惠王ハ魏の梁といふ土地は都を魏ハ本晉の地なり故に晉と云ふ
なり惠王の物語より我國前々より勢強き事ハ叟も

兼て知らるるなり然る寡人の身は及て東の方ハ齊と戦ひ敗
らして長子死さる西ハ秦の大將は七百里切取らる南ハ

毎々楚の國より掠奪あつたり寡人甚だ残念と思ひ耻
しむる願ハ何と云ふて右の度毎に討死する者の比は怨を洒

如之何乎 季子對曰地方百里而可以

王如仁政と民を施す刑罰を省く

税歛を薄く耕を易く

深く耕し易く耨る

以て其孝悌忠信を修め

父兄の事を出で

其長上を事し

制して以て秦楚之堅甲利兵と使可

其民の時を奪

耕耨して以て

其父母を養ふ

母凍餓し兄弟

妻子離散と

彼其民を陷溺

王往て之を

征せば夫誰と

敵せん

故曰仁者

小敵を王請疑

うと勿

王 孟子對曰今歸服也親之民也親之民也

王如施仁政於民省刑罰薄稅歛深耕

易耨壯者以暇日修其孝悌忠信入以

事其父兄出以事其長上可使制挺

以撻秦楚之堅甲利兵矣

今も早く仁義の政を施し人を刑罰に

者のみ限を設けず日ハ勿論常ハ心掛て孝弟忠信の道を

聞て心は修め家小在てハ父母外ハ年長上の人へ事する

て君より下を仁と親と下民ハ忠と孝との道を辨へ君臣の

制して之を以て甲と堅兵を利し彼奪其民時使

不得耕耨以養其父母父母凍餓兄弟

妻子離散其理如何と云ふ彼秦楚ハ限を他の敵國

妨げ中々耕耨問も軍用も命を失ひ父母妻子の

養を顧る事か老る者ハ自然と奔走して餓死及び

若きものハ他國へ離散ふりて兄弟妻子一所に集ふこと得

たハ天朝の應仁年中此れ乱を見ごと

彼陷溺其民王往而征之夫誰與王敵

かく國を陷溺万民を空へ陥し水は溺るる困窮を

所へ君臣合辭し命を惜る軍兵を以て往て征伐のハ

誰う以て王と敵對を故曰仁者無敵王請勿疑

いふ者ありんや孟子も古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

識るハ此詞を疑ひのふ

孟子也と古語を引て喩へる仁者ハ此義を

小似不之就て
畏る所を見不
卒然して問て
曰く天下惡乎
定と吾對て曰
く一は定むと

似人君就之而不見所畏焉卒然問曰
天下惡乎定吾對曰定于一

孰能之と一
ちん對て曰く
殺と嗜まざる
能之と一とせん

孰能與之對曰天下莫不與也王知夫
苗乎七八月之間旱則苗槁矣天油然

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

孰能一之對曰不嗜殺人者能一之
王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

孰能之と一
對て曰く天下
とんと莫人王夫
苗と知乎七八月
間旱セバ則ち苗
槁天油然と

王又問孰能一之對曰孟子の對ふは當時の如く人民

齊宣王問曰齊桓晉文之事可得聞乎

○齊宣王問曰齊桓晉文之事可得聞乎

孟子對曰仲尼之徒桓文之事

無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

事以傳世傳

之無以則王乎

之對曰曰將以鐘之豐（鐘、豊を以て）將王の曰く之を舍て其骸骸（骸、死に）罪無して死地（罪、咎）不就若くは忍び不對て曰く然らば則ち鐘に豊を廢せん（豊、豊を以て）曰く何を廢と可羊を以て之を易と識不有諸

曰く之有曰く是心以て王の足百姓比自王と以て愛むと為臣固に王之忍び不と知王の曰く然と誠百姓する者有齊國褊小と雖も吾何ぞ一牛と愛すん即ち其骸骸して罪無して死地と就く如くたうに忍び不故ゆへ羊を以て之を易

豐鍾王曰舍之吾不忍其骸骸若無罪而就死地對曰然則廢豐鍾與曰何可廢也以羊易之不識有諸

胡齡の語より王の堂上坐の時御めがや牛を牽て過るのあり王のめがや何へつと之を對て曰く豐鍾と云ふは鐘の類ひは六六抵苦勞と云ふ成就の時あやのとき却出來て力弊とならんといふの時牛の血を取て金と見へ即ち害なり是を為たす時王の曰く舍之吾今牛を見よ畜類のと言ふとも自然と心を通て金罪と死むと云ふ骸骸と哀なるを見よ忍びと云ふと牛客對て曰く然今より此業を廢すべしと王の曰くそれれも亦産業にかゝる事

曰有之曰是心足以王矣百姓皆以王為愛也臣固知王之不忍也

王の曰くいふ事有孟子の曰く即ち是心と云ふ右の王たぐふ徳と云ふと切の時御下の百姓ども申合はる王は物を愛るを見よ牛ハ數多く半價と云ふと故のゆへ然ども臣ハ固より王の仁心忍びを推して

王曰然誠有百姓者齊國雖褊小吾何愛一牛即不忍其骸骸若無罪而就

死地故以羊易之也（王これを聞のひ実ふもの然たり誠は百姓といふ者小）

曰王無異於百姓之以王為愛也以小易大彼惡知之王若隱其無罪而就死

王若其罪無一
死地就隱
擇之

王笑曰曰是誠
何の心ぞ哉我
其財を愛んで
之易ふ羊と
以てさるに非ざ
宜なる乎百姓之
我を愛むと謂

曰く傷く無是乃
仁の術多牛と
見て未だ羊と見
未君子之禽獸に
於る其生を見て

其死を見て忍び
不其聲を聞て
其肉を食するに
忍び不是と以て
君子ハ庖厨と遠
ざる也

王説人で曰く詩
小云く他人ハ心
予之を忖度と
夫子之謂也夫
我乃ハ心之を行
反て之を求めて
吾心を得不夫子
之を言我心を於
威威焉と有
此心之王ハ合所
以の者ハ何ぞ

地則牛羊何擇焉

無理とハ異なれど如何となれば王リ仁なるに多らざるのバ羊
とても生ある者なり大なると小なるを以て何れを擇むや

王笑曰是誠何心哉我非愛其財而易
之以羊也宜乎百姓之謂我愛也

王の難問をさる難儀に答て曰く夫もさる理は當る
誠は寡人何の心ぞ其時牛を憐れむや今先生の論を

とて吾も又吾心をあづからん然るも財宝を愛ての事とてハあらず
又実ハ百姓の評せしも宜なりと孟子の難問遂に云夫もさる

我らるを曰無傷也是乃仁術也見牛未
見羊也君子之於禽獸也見其生不忍
見其死聞其聲不忍食其肉是以君

子遠庖厨也

孟子かさひて王ハ王の心を説のめて曰く
百姓のナセリ言と傷みおひのるる

是乃仁の術と云ふの其子細ハ人の心ハ聖なるものなり聖賢
ハ明く常人ハ物に敬る人とも五常を備へるものゆゑ今目小
般鯨と視耳親ゆへを聞て此心おこる羊ハその場は
不有を以てかり君子の心ハ是らるるを以て食する物ハ遊
時を見らる魚又ハ声を聞覚る禽獸の肉ハ食するに忍び或ハ
畜養て生てゐる物ハその死する時の姿を以て憐れむを

王説曰詩云他人有
心予忖度之夫子之謂也夫我乃行之
反而求之不得吾心夫子言之於我心

有戚戚焉此心之所以合於王者何
也

王又孟子の説を聞て説で曰く誠は詩經なる詞こそ
あり譬へり詩は他人心と思へと有とる方よりその心

曰王曰復レ者有レ人曰レ吾力以レ百鈞レ而レ不足以レ舉レ一羽レ明レ足以レ察レ秋毫レ之末レ而レ不見レ輿薪レ則レ王許レ之乎

曰レ否レ今恩レ以レ禽獸レ及レ足レ而レ功レ百姓レ至レ不レ者レ獨何レ與レ然レ則レ一羽レ之レ舉レ不レ力レ而レ用レ不レ為レ者レ

輿薪レ之レ見レ不レ明レ用レ不レ為レ者レ百姓レ之レ保レ不レ見レ不レ明レ恩レ以レ禽獸レ及レ足レ而レ功レ百姓レ至レ不レ者レ獨何レ與レ然レ則レ一羽レ之レ舉レ不レ力レ而レ用レ不レ為レ者レ

曰レ王曰復レ者有レ人曰レ吾力以レ百鈞レ而レ不足以レ舉レ一羽レ明レ足以レ察レ秋毫レ之末レ而レ不見レ輿薪レ則レ王許レ之乎

內レを推付レて度知レる詞レあり夫子レの今レの謂レこれなり我レ今レも身レ小レ行レいて心レは悟得レる却レて夫子レの方レより我心レの程レを言明レせり王者レの道レは合レつと何レ也

曰有復レ於レ王者曰吾力

足以舉レ百鈞レ而レ不足以レ舉レ一羽レ明レ足以

察秋毫レ之末レ而レ不見レ輿薪レ則レ王許レ之乎

孟子レの曰レ即レち其心レを廣レく用レむ王者レの大仁レなり用レむは牛レ羊レを思レふ小愛レなりと一人レの力レ者レやんよその力レ者レ復レは吾レ力レにて百鈞レの重レく鳥レの羽レ一羽レの重レく又レ一人レハ吾レ眼レの明レく又レ秋レの中半レ獸レの毫レの末レの細レく又レ輿薪レの重レく又レ積レ薪レ八目レに於レてと一レニツレまぐ王レハ七レと許容レなりや

曰レ否レ今恩レ足レ以レ及レ禽獸レ而功レ不

至於百姓レ者獨何レ與レ然レ則レ一羽レ之レ不レ舉

為レ不レ用力レ焉輿薪レ之レ不レ見レ為レ不レ用レ明レ焉

百姓レ之レ不レ見レ保レ為レ不レ用レ恩レ焉故王レ之レ不

王レ不レ為レ也非レ不能レ也

政レの功レ者レハ獨何レとや右レのたレとて謂レハ羽レの舉レぬとハ力レと用レむとハ恩レの思レふとハ明レとと為レさるなり今レ御下レの百姓レは

御レ仁レ政レを蒙レりて保レくめとハ王レハ仁義レのレをレ行レふとハ力レと用レむとハ恩レの思レふとハ明レとと為レさるなり今レ御下レの百姓レは

曰レ不レ為レ者與レ不能レ者之レ形レ何

以レ異レ曰レ挾レ泰山レ以レ超レ北海レ語レ人レ曰レ我不

能レ是誠レ不能レ也為レ長者折レ枝レ語レ人レ曰

我不能レ是不レ為レ也非レ不能レ也故王レ之レ不

折レ人レは語レて曰レく

我能ハ不^レ是為^レ也故^レ曰^レ王^レ之^レ王^レ之不^レハ泰山^レを^レ挾^レんで^レ以^レて北海^レを^レ超^レる^レ之^レ類^レハ非^レ也

吾^レ老^レを^レ老^レと^レ以^レて^レ人^レ之^レ老^レと^レ及^レて^レ吾^レ幼^レを^レ幼^レと^レ以^レて^レ人^レ之^レ幼^レと^レ及^レて^レ天下^レを^レ掌^レる^レ可^レ也

至^レ以^レて家邦^レを^レ御^レと^レ言^レふ^レハ斯^レ心^レを^レ舉^レて^レ諸^レと^レ彼^レに^レ加^レる^レ已^レ故^レと^レ思^レふ^レ推^レを^レ以^レて四海^レを^レ保^レる^レ足^レ恩^レを^レ推^レ不^レバ^レ以^レて妻子^レを^レ保^レる^レと^レ無^レ古^レ之^レ人^レ大^レ人^レ過^レる^レ所以^レの者^レハ他^レ至^レ善^レ其^レ為^レ所^レと^レ推^レ已^レ今^レ思^レ以^レて禽獸^レ及^レ小^レ足^レ而^レ功^レ百姓^レ至^レ不^レ者^レハ獨^レ何^レを^レ與^レ權^レ然^レ後^レ知^レ輕^レ重^レ度^レ輕^レ重^レを^レ知^レ度^レに

王^レ非^レ挾^レ泰山^レ以^レ超^レ北海^レ之^レ類^レ也王^レ之^レ不^レ王^レ是^レ折^レ枝^レ之^レ類^レ也王^レ又^レ曰^レ恩^レを^レ用^レる^レと^レ寡^レ人^レ不^レ為^レ不^レ為^レと^レ不^レ能^レと^レ理^レの異^レを^レ以^レて示^レさる^レ孟子^レの曰^レく^レた^レ人^レは魯^レ國^レの泰山^レを^レ脇^レ下^レに^レ挾^レて^レ北^レの海^レを^レ超^レる^レと^レい^レふ人^レ不^レ能^レと^レい^レふハ誠^レに^レ能^レる^レ又^レ長^レ者^レの^レ圖^レを^レ受^レて^レ彼^レの^レ木^レの^レ枝^レを^レ折^レ来^レべ^レと^レい^レふ人^レ其^レ人^レ能^レと^レ語^レハ本^レより^レ不^レ能^レと^レい^レふ是^レ為^レさる^レ故^レ今^レ王^レの王道^レの仁政^レを^レ用^レさる^レ長^レ者^レの^レ幼^レを^レ慈^レ愛^レひ^レこれ^レを^レ及^レと^レい^レふ如^レ此^レな^レれ^レ詩^レ云^レ刑^レ于^レ天下^レと^レ治^レる^レの易^レと^レ掌^レ上^レの物^レを^レ運^レが^レ如^レと^レなり

老^レ吾^レ老^レ以^レ及^レ人^レ之^レ老^レ幼^レ吾^レ幼^レ以^レ及^レ人^レ之^レ幼^レ天下^レ可^レ運^レ於^レ掌^レ心^レを^レ推^レ廣^レと^レい^レふ君^レと^レなり^レて^レ上^レの父^レ兄^レの老^レと^レ敬^レの^レ下^レ々^レも^レ其^レ父^レ兄^レの事^レと^レい^レふ道^レを^レ行^レふ上^レの吾^レ子^レ弟^レの幼^レを^レ慈^レ愛^レの^レ下^レ々^レも^レ見^レる^レい^レて^レ子^レ弟^レの幼^レを^レ慈^レ愛^レひ^レこれ^レを^レ及^レと^レい^レふ如^レ此^レな^レれ^レ詩^レ云^レ刑^レ于^レ天下^レと^レ治^レる^レの易^レと^レ掌^レ上^レの物^レを^レ運^レが^レ如^レと^レなり

寡^レ妻^レ至^レ于^レ兄^レ弟^レ以^レ御^レ于^レ家邦^レ言^レ舉^レ斯^レ心^レ加^レ諸^レ彼^レ而^レ已^レ故^レ推^レ恩^レ足^レ以^レ保^レ四^レ海^レ不^レ推^レ恩^レ無^レ以^レ保^レ妻^レ子^レ古^レ之^レ人^レ所以^レ大^レ過^レ人^レ者無^レ他^レ焉^レ善^レ推^レ其^レ所^レ為^レ而^レ已^レ矣^レ今^レ恩^レ足^レ以^レ及^レ禽獸^レ而^レ功^レ不^レ至^レ於^レ百^レ姓^レ者^レ獨^レ何^レ與^レ詩^レ經^レの詞^レは家^レの内^レより^レ刑^レ法^レを^レ立^レ先^レの德^レも^レ所^レの妻^レ妾^レと^レ化^レして^レ兄^レ弟^レに^レ睦^レく^レ夫^レより^レ推^レ及^レて^レ社^レ家^レ邦^レ廣^レく^レ御^レ治^レる^レか^レり^レと^レあり^レ此^レ詩^レの心^レも^レ他^レか^レり^レ子^レを^レ慈^レ愛^レさる^レ此^レ心^レを^レ舉^レげて^レ彼^レ民^レを^レ推^レ育^レを^レ加^レる^レか^レり^レ外^レの故^レな^レり^レ恩^レを^レ推^レ及^レせ^レバ^レ四^レ海^レ保^レらる^レ大^レ德^レの^レ人^レ小^レ過^レる^レや^レい^レふ^レ他^レの^レも^レあ^レる^レ鳥^レと^レい^レふ^レ推^レ及^レさる^レか^レり^レ今^レ王^レの恩^レ心^レ權^レ然^レ後^レ知^レ輕^レ重^レ度^レ輕^レ重^レを^レ知^レ度^レに

然則後知長短物皆然心為甚王請度
 短知物皆然心為甚王請度
 心為甚王請度
 抑王甲兵與
 士臣之危
 怨諸侯構
 然則後知長短物皆然心為甚王請度
 快與
 王曰否吾何
 是之快
 將以吾大欲
 將所求
 王笑言不可與

然後知長短物皆然心為甚王請度
 之何物小輕と重と短と長と人の心と齊致
 稱錘を以て權合と丈尺を以て度なり心も權
 度の法を用ひてさかり王の仁愛も獸の方より重長
 百姓ハ輕短請ハ度の
 抑王興甲兵危士臣構怨於諸侯然後
 快於心與抑王ハ今戰を好み士臣ハ危甲兵を興
 王曰否吾何快於是將以求吾所大
 欲也王の曰く吾もその義快よとハありと只年々大
 言孟子これを聞て問て曰くその大欲の事と可得聞
 曰王之所大欲可得聞與王笑而不
 言孟子これを聞て問て曰くその大欲の事と可得聞

曰く肥甘の口は足
 不為與輕煖の體
 不足不與柳く米
 色の目く視不足不
 為與聲音の耳
 小聽不足不與便
 辟の前使令
 不足不與王之諸臣
 皆以て之を供する
 足王豈是為
 哉曰く否
 吾是為否不

曰為肥甘不足於口與輕煖不足於體
 與抑為米色不足視於目與聲音不足
 聽於耳與便辟不足使令於前與王之
 諸臣皆足以供之而王豈為是哉曰否
 吾不為是也孟子強て問て曰く王の欲るハ此數ヶ条
 一切肥肉ハ耳聾珍味不足なりとハ事又ハ輕煖
 孤裘多しとハ義々布衣服の體ハ纏との不足なり抑義女等
 來り色の不足なり或ハ耳ハ聞處の音樂々府の事ハ便辟の
 近習扈從多く自由ハ使令との不足なり右の内何の品にてある
 乎見ふは處王の諸臣は是不足なり王の前ハ供はる然
 王の心是為否ハ有りとありれば王の曰く否と
 曰然則王之所大欲可知已欲辟土地
 王の心是為否ハ有りとありれば王の曰く否と

楚辭集 卷之四

朝秦楚莅中國而撫四夷也。以若所為求若所欲猶緣木而求魚也。

孟子曰：王曰：是若所欲也。然其大欲一也。物推察之。一也。極其土地之廣。取辟其秦楚之兩大國。從之來朝。中而中國。莅之四方。夷之天下。保其天下之事。然則今適之也。若之所欲。無與怨。結んで。欲也。若之所欲。百姓を苦しむ事なれば。利運を得。思はせられたる。地上の木は取付居て水中の魚を求むる。

王曰：是若所欲也。然其大欲一也。物推察之。一也。極其土地之廣。取辟其秦楚之兩大國。從之來朝。中而中國。莅之四方。夷之天下。保其天下之事。然則今適之也。若之所欲。無與怨。結んで。欲也。若之所欲。百姓を苦しむ事なれば。利運を得。思はせられたる。地上の木は取付居て水中の魚を求むる。

木求魚雖不得魚無後災。以若所為求若所欲盡心力而為之後必有災。

王又曰：若是若所欲也。然其大欲一也。物推察之。一也。極其土地之廣。取辟其秦楚之兩大國。從之來朝。中而中國。莅之四方。夷之天下。保其天下之事。然則今適之也。若之所欲。無與怨。結んで。欲也。若之所欲。百姓を苦しむ事なれば。利運を得。思はせられたる。地上の木は取付居て水中の魚を求むる。

曰：可得聞與。

曰：可得聞與。

曰：鄰人與楚人戰。則王以為孰勝。曰：楚人勝。曰：然則小固不可以敵大。寡固不可以敵衆。弱固不可以敵彊。海內之地。

方千里者九。齊集有其一。以一服八。

何以異於鄰敵楚哉。蓋亦反其本矣。

王曰：吾欲處之土地。求之。災。孟子曰：然則今適之也。若之所欲。無與怨。結んで。欲也。若之所欲。百姓を苦しむ事なれば。利運を得。思はせられたる。地上の木は取付居て水中の魚を求むる。

服也何を以て鄒の楚を敵とす異かん哉蓋一亦其本小反也今王政を以て天下の仕を施さば天下の仕者皆王の朝を立と欲し耕を者皆王の野を耕を欲し商賈皆王の市を蔵を欲し行旅皆王の塗を出入と欲し天下之其君と疾んて欲する者皆王に赴想ふと欲を使ひ

敵國を歸服せしむんと鄒と楚の如くも危うきや蓋前今王發政施仁使天下仕者皆欲立於王之朝耕者皆欲耕於王之野商賈皆欲藏於王之市行旅皆欲出於王之塗天下之欲疾其君者皆欲赴愬於王其若是孰能禦之今王の政道を以て天下の仕官と望むもの王の朝廷を立とて欲べく農民王の田野を耕し商賈王の市中を身と蔵又行旅王の御領の塗を出るの心やむらうと天下の内悪君ありて百姓恨むる王自王ふ来赴て想へ如是はかくて王の人数を禦さざるも敵あり

其是の若く孰能之と禦ぐ

王曰く吾惜不能進是矣願夫子輔

王の曰く吾惜不能進是矣願夫子輔

吾志明以教我我雖不敏請嘗試之

王の曰く吾今追智惜して道を進むとかりと今より吾願く何とて夫子も吾志を輔て明くふ教の嘗て行ふ

曰無恆産而有恆心者惟士爲能若民

則無恆産因無恆心苟無恆心放辟邪

侈無不爲已及陷於罪然後從而刑之

曰く恒の産無し

是罔民也焉有仁人在位罔民而可

爲也

孟子の曰くすべて世の能治るる万民の産業恒く之

無とバ因て恒の心

義理の心たり然るに恒の産乏しくても恒の義理の心有とて

放辟邪侈爲不

者ハ惟操節ある士の能爲とも有べし通用の民情ハ大りと

無已罪人陷るるに

者ハ惟操節ある士の能爲とも有べし通用の民情ハ大りと

小及で然して後に
 従うて之を刑を
 是民と罔する也焉
 人位は在
 て民と罔して而
 て為可と有人
 是故は明君民之
 産と制し必らずと仰
 下で父母の事に
 足俯てて妻子と
 畜かうて足樂歳
 八身と終るまで飽
 年八死亡と免づる
 然して後は驅て
 善小之使故多し
 民之之に従ふ
 と輕し

恒の産を失ふれば恒の心か。苟小恒の心なれば放邪邪後の心より罪を作さるハナリ。其罪よきと人と陷る段は刑に必竟万民を罔みかくる道理を仁君位は居るを為さるべくと云ふは是故明君制民之産必使仰足以事父母俯足以畜妻子樂歲終身飽凶年免於死亡然後驅而之善故民之從之也輕。民の産業を制するは父母を養ひ妻子を蓄むの制度あり。樂歲は食物ふハ飽凶年ハ餓死せぬなど定ぬるなり。右やうに家庭は夫より心も程もなればいふも道引驅廻て善教の方へ之より事もやう輕さなり。

今也制民之產仰不足以事父母俯不
足以畜妻子樂歲終身苦凶年不免於

死亡此惟救死而恐不贍奚暇治禮義

哉 又當今の如く制してハ父母妻子の養ひハもろゝ兼歳と云ふ所帶の困苦追ふ凶年ハ少一の由断あはバ生居るやども

計ごとく死なむ工夫をなすても猶不贍なりんことを恐る

王欲行之則盍反其本矣

然レ王も中國を莅て天下を自由よせんとの大志あり。蓋シ之は天下を歸服せし王政といふ道あり。其本へ心をどう反さざるやとなり。

五畝之宅樹之以桑五十者可以衣帛
矣。鷄豚狗彘之畜無失其時七十者可
以食肉矣。百畝之田勿奪其時八口之
家可以無飢矣。謹庠序之教申之以孝

其時と失かず無
七十の者以て肉と食
と可百畝之田其時と
奪と勿八口之家以
て飢と無可庠
序之教を謹
之申ふ孝悌之
義と以ても頌白の
者道路に負戴せ
不老者帛と衣肉と
食と黎民飢不寒
不然して王と不者
未と之有未と

梁惠王章句下

梁惠王章句下
莊暴子孟子見て
曰く暴主を
見王
暴に語る樂を好む

以て暴未^ひ以て對^{たい}
 と有^あ未^な曰^{いは}く衆^{しゆ}好^{この}
 何如^{いか}孟子對^{たい}曰^{いは}
 王^{わう}の衆^{しゆ}と好^{この}と甚^{しん}
 齊國^{せいこく}其庶幾^{しそけい}乎
 他日^{たにち}王^{わう}と見^み曰^{いは}く王^{わう}
 嘗^{かつ}て莊子^{しやうし}小語^{せうご}
 衆^{しゆ}と好^{この}と以^{もつ}てと
 有^あ諸^{しよ}王色^{わうしき}と憂^{うれ}
 て曰^{いは}く寡人^{わうじん}能^{あた}先^{まづ}
 王^{わう}之^の衆^{しゆ}と好^{この}むと非^{あら}ど
 直^{ただ}らふ世^よ俗^{しやく}之^の衆^{しゆ}と
 好^{この}む耳^{みみ}
 曰^{いは}く王^{わう}之^の衆^{しゆ}と好^{この}と
 甚^{しん}くば則^{すなは}ち齊^{せい}ハ
 其庶幾^{しそけい}乎今^{いま}之^の衆^{しゆ}
 公^{こう}之^の衆^{しゆ}の猶^{なほ}

曰聞之得可與

曰獨樂之樂

曰與人與樂之樂

曰孰樂之樂

若不少與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂之樂與樂之樂

樂曰不若與人曰與少樂樂與衆樂

樂孰樂曰不若與衆臣請爲王言

樂王これを聞て喜て曰く其理聞可得や 孟子といふ曰く誠

樂樂といふ人意旨ハ如何や獨の時と相手の人ありとハ何の樂

獨より相手ありて且衆多なるに不如とあるは依て孟子説く

ハ然ハ王の爲は樂の 今王鼓樂於此百姓聞

王鐘鼓之聲耳管籥之音舉庾首臆

頌而相告曰吾王好鼓樂夫何使我

至於此極也父子不相見兄弟妻子離

散今王田獵於此百姓聞王車馬之音

見羽旄之美舉庾首臆頌而相告曰

吾王好田獵夫何使我至於此極也

父子不相見兄弟妻子離散此無他不

與民同樂也 今王音樂をかくのんは御下の百姓とも

鐘鼓管籥の音を聞てハ何の厭もて皆

頌を眉を臆て寄相告ふ何故よりんて困窮ふ極て鼓樂を

樂といふ事やと或ハ王の田獵よりん時ハ百姓とも車馬の音

を聞羽旄の美をみんて見ふ付ても舉額を眉を臆て又右の

親然と困めらる父子相見ともんば兄弟妻子離散よりんは

今王ハ音樂田獵の樂をハめらる下を恤あはむ事かく

の過たり 今王鼓樂於此百姓聞王鐘鼓

之聲管籥之音舉欣欣然有喜色而

百姓王の鐘鼓之

五十一

二二

樂論

聲管命之音を
聞舉欣欣然
て喜色有而
相告て曰く吾王
庶幾ハ疾病無與
何とて能鼓樂
と今王此田獵を
人百姓王の車馬
之音と聞羽旄之
美を見舉欣欣然
て喜色有而
相告て曰く吾王
庶幾ハ疾病無與
何とて能鼓樂
と今王此田獵を
人百姓王の車馬
之音と聞羽旄之
美を見舉欣欣然
て喜色有而

相告曰吾王庶幾無疾病與何以能鼓
樂也今王田獵於此百姓聞王車馬之
音見羽旄之美舉欣欣然有喜色而相
告曰吾王庶幾無疾病與何以能田獵
也此無他與民同樂也今王與百姓同
樂則王矣
民と憂樂を與はざる時ハ民も又上を戴く
鐘管簫の音を聞ても舉も欣欣然喜の色顔は出て相告さる
やも吾王の徳ハ願ハ永く君とわたりぬるや何とぞ無病ハ
在りてよく音楽をかりぬるや或ハ田獵かりぬるやふも
車馬の音羽旄の美を布を見ふ付ても右や中合なるべし
これ他の義ハ民と憂樂を與はざるはゆかり今王も人
の私とハ事を去て周と仁の道とハ心を留めず則天下王とん

則ハ王とん
齊の宣王問て曰く
文王之囿ハ方七十里
と有諸孟子對て
曰く傳に於て之有
曰く是若く其大
乎乎曰く民猶
以て小なりと為
曰く寡人之囿ハ方
四十里民猶以て大
なりと為ハ何と曰く
文王之囿ハ方七十里
勿芻蕘の者往雉免
の者往民與之と
同とて民以て小
なりと為亦宜と
不乎

○齊宣王問曰文王之囿方七十里有
諸孟子對曰於傳有之
宣王の問かり聖人文王
の囿方七十里四方と承
傳に於て其事有や孟子の曰
傳に於て文ふを思ふ
曰若是其大乎曰
民猶以為小也
宣王又曰くいやく大なり乎孟子
の曰く然と民百姓ハ猶小ハ囿と
曰寡人之囿方四十里民猶以為
大何也曰文王之囿方七十里芻蕘者
往焉雉免者往焉與民同之民以為小
不亦宜乎
王の曰く寡人の囿ハ方四十里なり民百姓
と大なり乎ハ如何なる道理を孟子の
曰くこれ文王の囿ハ禁制とてなく其内ハ芻蕘の者往雉免
同くその内ハ入るなり民と與はざるを以て害さる然ハ民の

臣始境至國之大禁至同然後敢入臣聞郊關之內有囿方四十里殺其麋鹿者如殺人之罪則是方四十里為阱於國中民以為大害不亦宜乎

齊宣王問曰交隣國有道乎孟子對曰有惟仁者為能以大事小是故湯事昆夷惟智者為能以小事大

臣始至於境問國之大禁然後敢入臣聞郊關之內有囿方四十里殺其麋鹿者如殺人之罪則是方四十里為阱於國中民以為大害不亦宜乎

湯事昆夷惟智者為能以小事大

大故大王事獯鬻句踐事吳

湯事昆夷惟智者為能以小事大

齊宣王問曰交隣國有道乎孟子對曰有惟仁者為能以大事小是故湯事昆夷惟智者為能以小事大

湯事昆夷惟智者為能以小事大

以大事小者樂

湯事昆夷惟智者為能以小事大

天者也以小事大者畏天者也樂天

湯事昆夷惟智者為能以小事大

者保天下畏天者保其國

湯事昆夷惟智者為能以小事大

者保天下畏天者保其國

湯事昆夷惟智者為能以小事大

者保天下畏天者保其國

湯事昆夷惟智者為能以小事大

者保天下畏天者保其國

詩云畏天之威詩云云天之威于時保之詩云云天之威

畏人時于之保

王王曰大哉言矣言寡人有疾寡人有疾寡人好勇寡人好勇

對曰王請無好小勇夫撫劍疾視曰彼

惡敢當我哉此匹夫之勇敵一人者也

王請大之孟子對曰大勇

詩云王赫斯怒王赫斯怒

其旅以遏徂莒以篤周祜

下此文王之勇也文王二怒而安天下

之民詩經之詞

惟曰其助上帝寵之四方

我在天下曷敢有越厥志

武王恥之此武王之勇也

怒而安天下之民

書曰武王之勇也

詩云王赫斯怒王赫斯怒

其旅以遏徂莒以篤周祜

下此文王之勇也文王二怒而安天下

之民詩經之詞

惟曰其助上帝寵之四方

我在天下曷敢有越厥志

武王恥之此武王之勇也

怒而安天下之民

書曰武王之勇也

詩云王赫斯怒王赫斯怒

其旅以遏徂莒以篤周祜

下此文王之勇也文王二怒而安天下

之民詩經之詞

惟曰其助上帝寵之四方

我在天下曷敢有越厥志

武王恥之此武王之勇也

怒而安天下之民

書曰武王之勇也

詩云王赫斯怒王赫斯怒

其旅以遏徂莒以篤周祜

下此文王之勇也文王二怒而安天下

之民詩經之詞

惟曰其助上帝寵之四方

我在天下曷敢有越厥志

武王恥之此武王之勇也

怒而安天下之民

也而武王亦不怒天下之民安んぞ

今王亦不怒天下之民安んぞ

賢者亦此有乎孟子對曰

得不得而非其上者亦非

民之樂也樂者亦其樂

の生降りてこの世あり然天子がく奉る万民の君とありて師匠とありて善惡を正し教の理あり

今王亦一怒而安天下之民民惟恐王之不好勇也

○齊宣王見孟子於雪宮宣王曰賢者亦有此樂乎孟子對曰有人不得則非其

上矣不得而非其上者非也為民上而不與民同樂者亦非也

憂民之憂者民亦憂其憂樂以天下憂以天下然而不王者未之有也

君の者或ハ年柄よく下を悦び樂むときハ君も亦く樂む事ハ多ハ民の憂ありてハ君も亦く多ハ民の憂ありて天下安んぞ

昔齊の景公晏子
 曰て曰く吾轉附
 朝舞觀海は道
 ぐる而して南
 琅邪小放んと欲も
 吾何と脩て以て
 先王の觀つ丘と可
 晏子對て曰く善
 哉同天子諸侯
 適と巡狩と曰巡
 守ハ守る所と巡
 侯天子に
 朝さる
 述職ハ職とる
 と述る也事小非
 る者無春ハ耕と
 と省て足不と補

昔者齊景公問於晏子曰吾欲觀於轉
附朝僂遵海而南放于琅邪吾何脩
而可以比於先王觀也昔者景公政道志ざ
を爲めんとて大夫晏子に問ひ
曰く吾國中を巡見して轉ア附イ山イより朝僂アの山イを觀ミんと欲スなり
とんより海上を経て琅邪の邑イに放スべし何仕置シを脩スて昔の聖
王の觀行ミをイ右イをイ比スつとイや
晏子對曰善哉問也天子適
諸侯曰巡狩巡狩者巡所守也諸侯朝
於天子曰述職述職者述所職也無非
事者春省耕而補不足秋省斂而助不
給夏諺曰吾王不遊吾何以休吾王不

今ハ然ラズ師ク行
 糧食モ飢ル者
 食セ弗勞カス者
 息弗貽貽テ
 晉譴民乃ハチ慝
 作命ニ方民ト
 虐モ飲食流ルガ
 若シ流連荒亡諸
 侯の憂ト為

豫吾何以助一遊一豫爲諸侯度
 天子も賢人の稱ある人なり 對て曰く誠よ善哉王の志ぞ 夫
 いふ一人大徳あるの天子ハ諸侯の將と云ふ所の領地を巡の是を
 巡狩といふ 諸侯八年々天子へ來朝して各の執る職を述り上る
 是を述職といふなり 天子天下政道の事は非ざるハナリ 春民の
 耕ぜて粟稻までも食物を敷敷とハなさんと不足するを施し
 補ひ秋ハ年貢と斂る時も給ぬところを助ることをかう夫ハ
 古ハ是といふ代の諺辭也 吾王リ 巡見の御遊をく 吾等
 何を以て休息せんや 吾王リ 巡見を豫と云ふと 吾等何ぞ生
 命を助らんといふ傳り かくのごとく 昔の帝王の御心ハ丁々
 遊び一とたびの豫と云ふも 万民の爲め國々諸侯の度となりぬ
 者なり
 今也不然師行而糧食飢者弗食
 勞者弗息 眊眊胥譏 民乃作慝 方命
 虐民 飲食若流 流連荒亡 爲諸侯憂

流は從^{もつ}て下^{くだ}て
反^{かへ}て忘^{わす}る^る之^のを流^り
と謂^い流は從^{もつ}て
上^{あが}て反^{かへ}て忘^{わす}る^る之^のを
連^つて謂^い獸^{けつ}を從^{もつ}て
厭^{いと}ふ^ふ無^な之^のを荒^あれと
謂^い酒^{しゆ}を樂^がんで
厭^{いと}ふ^ふ無^な之^のを亡^なしと
先^{まづ}丁^{てい}連^つ之^の樂^がを
亡^なし行^いはる^る無^な
惟^{ただ}君^{きみ}の行^いはる^る

今の世に於ては然るに、あるは君より従ふもの、師ハ民の糧を
 食つて、權威を振ひ、驕奢をなさん、それゆゑ民とも飢へ、食
 へずとも能はざる、是上ハ王命より下ハ民を虐び、飲食おろし、水の
 流るるを一統し、流連荒亡して、從流下而忘反、謂
 諸侯の憂とせむ、
 之流從流上而忘反、謂之連從、獸無厭
 謂之荒樂、酒無厭、謂之亡、遊山翫水の遊の
 驕奢は居連なりと連といひ、鹿特、鷹、獬はこゝろ厭なり、田畠
 をつらつに見ざるを荒といひ、晝夜酒を吞
 色に迷ふを亡と名づくることなり、
 先王無流連
 之樂、荒亡之行、惟君所行也、
 昔の徳ある帝王ハ、これ事を樂とせしめて行ふを
 更になし、惟君の所行也とて、晏子の言なり、

景公説ふ大い
國に戒め出て
郊に舍る是に於
て始し興
足不を
師
爲よ君臣相説ふ
之樂を作蓋
徴招角招是也
其詩に曰く君を
畜む何のむ君
を畜む者ハ君
を好む也
齊の宣王問て曰
く人皆我ハ明堂
を毀てと謂毀人
諸已乎孟子

景公說大戒於國出舍於郊於是始興
 發補不足召太師曰爲我作君臣相說
 之樂蓋徵招角招是也其詩曰畜君
 何尤畜君者好君也

 景公のことが賢明か
 畜君は是を聞て説く
 國中へ觸戒め此度の巡見例は異なりとして出馬ありて本陣
 の舎をたかり始めて倉廩を充て貧民不足を賑ひ大師
 を呼て君臣國中相互に説の音楽を作意ありと云ふ
 今の世は傳る徵招角招といふ者は是曲なり其詩の中は君を
 畜ふ何の尤ありんといふはかく晏子などく君の今迄の遊樂を
 禁め畜て引直さといふは君は逆してはかく君を敬ひ好むを
 畜るといふものなり

齊宣王問曰人皆謂我毀明堂毀

曰夫明堂ハ王者之堂主王政を行ふ處と欲せば則ち之を毀す勿

王の曰く王政則ち之を得可與對て

曰く昔者文王之岐を治り耕と

者九一仕者稼

征七石一梁材不

無入と

無と鰥と曰老て

夫無と寡と曰

若て子無と獨

曰幼て父無

と孤と曰此四者

ハ天下之窮民

て而て告

無者ハ文王

政と小必る斯四

の者と先と詩

と云く可かう富

諸已乎孟子對曰夫明堂者王者之堂也王欲行王政則勿毀之矣

我領分ある明堂を建廢ふならん金益なり毀ぶるとつものあり毀べやとこの事已なりやとの同なり明堂といふ泰山の麓に在る周の天子東へ巡見の時諸侯が會合し伺ふ來りてとらるる則ち政を行の処なり孟子對ふは王と先王仁政を行ひ王曰王

政可得聞與對曰昔者文王之治岐也耕者九一仕者世祿關市譏而不征澤梁無禁罪人不孥老而無妻曰鰥老而無夫曰寡老而無子曰獨幼而無父曰

孤此四者天下之窮民而無告者文王發政施仁必先斯四者詩云哿矣富人哀此茕獨

王道の政法ハ文王の同なり孟子對て曰く文王の岐州を治り法ハ一里四方を一井と名づけて田地を界を建九ツに分て八分ハ百姓に下を一分ハ上へ是を九が一といふ仕官の面々扶持を代々これ官の器量を撰て仕るる市場の關ハ狼藉喧嘩の譏りて今れ如く征稅の爲あると泥梁の獄ハ禁制は下々の產下るる罪人を殺し當人の子とてを殺しとて四品困窮人を惠むと老人の妻たる者老女の夫たる者年よりて子なき者幼少て父母あるものつと養ひの術なき困窮人なりと鰥寡孤獨の四ツハ告訢するものなり文王の仁政つと是を第一と救ひのつと詩經も人の身の上を詠して可矣富人獨身とてとらるる王曰善哉言乎曰王如

行ハ不王の曰

寡人疾有寡

人化良を好む

對曰昔者公

劉金化良を好詩

云乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

倉乃乃積乃

善之則何為不行王曰寡人有疾寡人

好貨王曰寡人有疾寡人好貨王曰寡人有疾寡人

詩云乃積乃倉乃裏餘糧于橐于囊

思戰用光弓矢斯張干戈戚揚爰方啟

行故居者有積倉行者有裏糧也然

後可以爰方啟行王如好貨與百姓同

之於王何有孟子聞之曰王如好貨與百姓同

詩經是也孟子曰王如好貨與百姓同

底乃之橐裏者百姓之懷人數を戰て勢を光天よと云ひ

て弓矢を張干戈戚揚を以て用意をす一畝の土地へ遷人としてその

行を啓て方て爰威をたうのふと思へりかく公劉已が

心を推て百姓より及り故に家小居るもの道を行人の食物

十分なり然して後道を啓て戦ひて王曰寡人有

疾寡人好色對曰昔者大王好色愛厥

妃詩云古公亶父來朝走馬率西水滸

至于岐下爰及姜女聿來胥宇當是時

也内無怨女外無曠夫王如好色與百

姓同之於王何有王曰寡人有疾寡人

好色王曰寡人有疾寡人好色王曰寡人有疾寡人

詩云乃積乃倉乃裏餘糧于橐于囊

思戰用光弓矢斯張干戈戚揚爰方啟

行故居者有積倉行者有裏糧也然

後可以爰方啟行王如好貨與百姓同

之於王何有孟子聞之曰王如好貨與百姓同

を好む百姓與之
同ぢふを王する小
於て何う有ん

孟子齊の宣王
謂て曰く王之臣
其妻子を其友
と誣して而して

曰く士師士を
と能はば則ち
之を如何王の曰く

攻来を逃去るを諒より岐山下へ都を遷来の小時朝
をやく馬を走て西水の滸よりひ率て愛ふ其の妻氏と及ふ
宮中の字を眉のうりあり是時ハ智嫺を早く取結バチ
故ハ年長るを曠く独居るを怨むるあり男子娘といふ者
なく不義をづつとつとつと聞ざりし是の如く色を好て
百姓に及ぶる万民帰服して王する

○孟子謂齊宣王曰主之臣有託其妻
子於其友而之楚遊者比其反也則凍
餒其妻子則如之何王曰棄之

孟子ある曰宣王へ物語りつたは王の臣下に己が友輩に妻子
を託て楚國へ遊居るを致さんと思託し者右の仁の反てゐるまで
養をたかると餓凍などせは如何
御仕置かされんや王曰棄絶へ
曰士師不能治士
則如之何王曰已之
正に治ると能はば如何をや

曰く四境之内治
不ハ則ち之を如何
王左右を顧みて
他を言

王の曰くそまハ官と
とあけ已さんま
曰四境之内不治則如之
何王顧左右而言他
孟子右の何を設てあは
今御領分四方の境の内
治ると思ふとハ誰か暗にあつたやとなく宣王を聞
ひて對ひて左右の人と他事と言ふまゝに
過を聞バ改むさふ徳を尊と賢者を敬の事なり後世の
諸侯多くこの例なり恥づてゐる

孟子齊の宣王
見曰く謂所故國
者喬木有と謂
と謂ふ非世臣
有と謂也王親
臣無昔者進む
所今日ハ其亡を
知不

○孟子見齊宣王曰所謂故國者非
謂有喬木之謂也有世臣之謂也王
無親臣矣昔者所進今日不知其亡
也
故と家族又ハ故き國を導くハ喬木古
跡あるを以てハあつた世續より大臣家あるを以て謂なり
然る王ハ故く親き臣といふ者なり或ハ昔者より王の側に進
者ありと思ふに早今日ハ有亡を不知るであらう

王曰吾何

て其不才を識

て而して之を舍

曰く國君賢と進

もつて已て之を得

不が如し將より卑

を尊するに踰る

を威するに踰る

んと將に慎ま

可けん與

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

賢と曰く

未可也

賢と曰く

王曰吾何以識其不才而舍之

王の曰くその義吾が及ばむ何を以てか始より不才といふを

識て舍めりてその定まりありんや

曰く國君進賢如不得已將使卑踰尊踰

踰威可不慎與孟子曰くはるる君より者國を

舉るるを不得已と心ひるるをざるを賢人を引奉るるを

至る大城に轉るるを義なり知ることなれば卑者者を尊貴

者の上へ奉るるの踰るる者親戚なる者の上へ左右皆昌

賢未可也諸大夫皆曰賢未可也國人

皆曰賢然後察之見賢焉然後用之

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

左右皆曰不可勿聽諸大夫皆曰不可

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

賢と曰く

未可也

賢と曰く

國人皆賢と曰く

孟子齊宣王曰爲巨室則必使工師求大木工師得大木則王喜以爲能勝其任也匠人斲而小之則王怒以爲不勝其任矣夫人幼而學之壯而欲行之王曰姑舍女所學而從我則何如

○孟子見齊宣王曰爲巨室則必使工師求大木工師得大木則王喜以爲能勝其任也匠人斲而小之則王怒以爲不勝其任矣夫人幼而學之壯而欲行之王曰姑舍女所學而從我則何如

用少左右皆不可
曰聽之勿聽諸
大夫皆不可
聽之勿國人皆
可曰然
後去之

勿聽國人皆曰不可然後察之見不可
焉然後去之

左右皆曰可
曰聽之勿聽諸
大夫皆殺之可
曰聽之勿聽國

可殺勿聽國人皆曰可殺然後察之見

人皆殺之可也
然則殺之可也
案一殺之可也
見之然則殺之
之殺之故曰
國人之殺之
也曰也

此の如くして然
後以後以後民
の父母と為可
の宣王問て

曰く湯
武王紂
諸孟子對て曰
傳は於て之有曰
く臣其君を弑
する可なり乎

今璞王此有萬
鎰と雖も必らず王
人との彫琢を
國家を治るに
至るは則ち姑
の學所を舍て
而して我に従
て則ち何を以て
王人よ玉を彫
琢するを教ふ
異なり

可殺焉然後殺之故曰國人殺之也

右の人を殺すは罪ありと曰ふも聽入るやと勿き諫矣
臣下も又殺すべしと曰ふも聽入るやと勿き國中の民百姓を殺す
べしと曰ふ然則殺すべしと案一考へつゝ殺すは罪ありと見
然後殺すべしと殺すべしと故に國中の人民の爲に殺すべしと
名目とあり中く如此然後可以爲民父母
私ふはなり

かや重なるを以て君を民の
父母と仰ぎ載く者なり

齊宣王問曰湯放桀武王伐紂有

諸孟子對曰於傳有之曰臣弑其君

可乎傳は殷の湯ハ夏の桀王を追放して天下の主となり
周の武ハ殷の末の紂王を伐亡して天下の主となり

とや此事有諸否と孟子對ふハ傳書に載てあるあり
と王の問は湯と武ハ聖人の譽あれども諸侯なり桀王紂王ハ

今有璞玉於此雖萬鎰必使玉人彫琢

之至於治國家則曰姑舍女所學而從

我則何以異於教玉人彫琢王哉

右の理をたてて今日今や萬鎰の宝ふを璞王ありん
と必しも王人を使て之を彫琢せざるべし王ふるは任
せざるなり今日國家を治る時ハ德ある者よ任せざるなり然るに
王ハさうつゝのあはれ先づ姑く我に従ふとのめ誠とされハ
素人王王人玉の彫琢する術を教ふ異なり

齊人伐燕勝之史記にも燕の噲王位を其相國

宣王問曰或謂寡人

勿取或謂寡人取之以萬乘之國伐

之を取謂萬
乘之國を以て萬
乘之國を伐五
旬して而して
之を取人か此
に至ら不取不
る天の殃ひ有
之を取何如
孟子對曰之
を取而して燕
民悦びる則ハ
之を取有
武王是也之を取
て而して燕の民
悦び不バ則ハ取
と勿も古之人

萬乘之國五旬而舉之人力不至於此
不取必有天殃取之何如王の曰くこの度
ちる子直は燕を押領するといふ者あり又或ハ取と勿
るといふものあり寡人つらくも寡人として万乗の國
燕も同じく万乗の國なり同等の合戦するにやしく五旬日
して勝利を得て燕の城を引率より申く人間の力にて
かゝるに至る一に覺る然ハ天の與する
孟子對曰
取之而燕民悦則取之古之人有行之
者武王是也取之而燕民不悦則勿取
古之人有行之者文王是也孟子對曰
孟子對曰ハ
王若燕と乘取
注領するといふ燕の土地の民づきも悦ぶといふとなく取之
古の明君さるるを行ひしハ則ち武王なり若し悦ばざるバ

之を行ふ者有
文王是也

取之ハ古の明君
以てハ文王の例なり

以萬乘之國伐萬乘之國

萬乘之國を以て
萬乘之國を伐
簞食壺漿以て
王の師を迎豈
他有哉水火を
避と也水の益
深如火の益
熱如亦運
齊人燕を伐て
之を取諸侯將
謀て燕を救
んと諸侯寡人
伐を謀者多し

也如水益深如火益熱亦運而已
萬乘の國相ともに合戦かゝるごとく乱を好むハあるト然ハ王の
出馬を願ひ帰服してさるるも食を簞の行厨に入漿を壺に入て
王の諸軍勢を迎へ喜ぶものハ他有哉今迄の政道の水火の難
よりも苦きを避くことなかりきや若君の欲心起バ水の益
深きハ火の益熱かり理りて他の敵國より攻来る
たハ水火の盛なりて運来らんとて已矣
○齊人伐燕取之諸侯將謀救燕宣王
曰諸侯多謀伐寡人者何以待之
右引續て遂ハ燕の國を押領ありきハ他の諸侯さるる惡
て齊を討て燕を救んと謀る宣王ふり恐る何によりて

孟子對曰臣聞七十裏為政

也對曰昔殷之湯王八僅七十裏の國より起て天下の政務

天下歸服の行ひを為さるふ依てなり書曰湯一征自

葛始天下信之東面而征西夷怨南面

而征北狄怨曰奚為後我民望之若大

早之望雲霓也歸市者不止耕者不憂

誅其君而吊其民若時雨降民大悅

書曰後我后后來其蘇

今燕其民也虐

王往而征之民以為將拯已於水火之

中也簞食壺漿以迎王師若殺其父

兄係累其子弟毀其宗廟遷其重器

一其子弟と係

迎若其父兄を殺

漿以て王の師を

んと將簞食壺

孟子對曰臣聞七十裏為政

也對曰昔殷の湯王八僅七十裏の國より起て天下の政務

天下歸服の行ひを為さるふ依てなり書曰湯一征自

葛始天下信之東面而征西夷怨南面

而征北狄怨曰奚為後我民望之若大

早之望雲霓也歸市者不止耕者不憂

誅其君而吊其民若時雨降民大悅

書曰後我后后來其蘇

今燕其民也虐

王往而征之民以為將拯已於水火之

中也簞食壺漿以迎王師若殺其父

兄係累其子弟毀其宗廟遷其重器

一其子弟と係

迎若其父兄を殺

漿以て王の師を

んと將簞食壺

累其宗廟を毀ち其重器を遷さば之を如何ぞ其可なりん天下固より齊之疆を畏る今又地を倍して而して仁政を行ふ不是天下之兵を動かさる

王速出令を以て其旄倪と反其重器を以て燕の衆に謀り君を置而して後之を去ば則ちハリ

鄒魯與閔穆公同て曰く吾有司死者者三十三人而民之死莫之疾視救之不之如何則ハリ可なりん孟子對て曰く凶年飢歲君之民老弱轉乎溝壑壯者散而四方者幾千人矣而君之倉廩實府庫充有司莫以告

如之何其可也天下固良齊之疆也今又倍地而不行仁政是動天下之兵也

今度燕の君その民を虐む王往て征伐し之の時民の以為然若その國民の父兄子弟を係累又八國守大夫の宗廟を毀て重器を奪遷バ如何可也や天下固より齊ハ強國なれば何ぞハ軍來べしと恐居所今又土地大に奪はれて仁義を用ふべしと危くして自然と天下の人氣動て安らうと

王速出令反其旄倪止其重器謀於燕衆置君而後去之則猶可及止也

王速く出令命を以て有て係累一旄人倪子を燕へ送らう反其重器物をえへ止置その人燕の衆人と相謀ありて國守を定めさうありて後燕を去るの一大事の起る始め燕の合戦を止めし位及べしと

○鄒魯與閔穆公問曰吾有司死者

三十三人而民莫之死也誅之則不可

勝誅不誅則疾視其長上之死而不

救如之何則可也

鄒魯國と戦争あり鄒の小吾有司なる者討死三十三人あり然る軍平并ふ吾國の民一人も見ざる討死せざるやと云ふことあり之を正して下々と誅せんときれバ幾人と筆勝をあかすバその後長上の死をも疾視ありて救ざるべし如何して可んや

孟子對曰凶年飢歲君之民老弱轉乎

溝壑壯者散而之四方者幾千人矣而

君之倉廩實府庫充有司莫以告

實府庫亮有司
以告莫是上
慢下也殘
多曾子曰之
戒之戒之再
者也夫民今
而後之君
反之也君無尤焉

君仁政を行
斯民其長
親其長
死

勝文公問曰
勝小國也
事齊乎
孟子對曰
謀吾能及
非也
斯城也
與之守死
弗則ハ
可也

是上慢而殘下也。曾子曰：戒之戒之。出
乎爾者反乎爾者也。夫民今而後得
反之也。君無尤焉。
孟子の曰く王ハ只諸軍及
民の老人弱年の輩ハ溝壑ヲ轉ヤ
散之者幾千人ナリナクハ而も倉廩米并ハ府庫實充
ナルト云て之を賑ヒト云と君ハ告もの莫カヤの仕方
上る者民百姓を慢輕下を殘といふ者ナリ曾子の語ハ戒
戒ヒと者身の行ナリ我ナリと又我身ハ報る者ナリ再
身より出て再の身ハ立及とナリ今民も長上の討死を疾視
るハ是返報の心ナリ君ナリと云ハ人ナ

君行仁政斯民親其上死其長矣

○勝文公問曰勝小國也問於齊楚

事齊乎事楚乎

孟子對曰是謀非吾所能及

也無已則有一焉鑿斯池也築斯城

也與民守之效死而民弗去則是可為

也

○勝文公問曰齊人將築薛吾甚恐

如之何則可

孟子對曰昔者大王居邠

如之何則可

則ハチ可ナク孟子
 子對テ曰ク昔者
 大王邠ニ居狄人之
 も侵ミ去テ岐山
 之下ニ至テ居擇
 之ヲ取リ非ズ
 已トモ得テ不也
 苟ハ善ヲ為シ後
 世子孫必ズ王者
 有ル君子業ヲ
 創統ヲ垂繼可
 也為夫成功ノ若
 ハ則チ天也君
 如ク之ヲ善ト為
 ン

狄人侵之去之岐山之下居焉非擇而
 取之不得已也文公又同て曰く今齊より吾國近く
 薛の地は城を構ふるものありは異心
 ありや人如何せんや孟子の曰く昔者周の大王ハ邠の地を都
 とせしに狄人金道よりて常小攻侵せり大王の仁心民を憐
 依て立去て岐山の下の遷居のしる場所を
 擇しふありハ已トモ得ざるなり苟為善後

世子孫必有王者矣君子創業垂統
 為可繼也若夫成功則天也君如彼何
 哉彊為善而已矣右大王の例もあり凡そ人善行
 の上ハ福を蒙らざるも後の子孫へ報て盛なるべし大王乃
 如くその孫武王ハ至て天下の主となるむより君子衆人
 と欲む必も善行を垂施を統緒の後へ傳繼しむるなり
 然るも其功の成就するも否とハ天命は任まると今王の力齊と

如何とも致術かゝる極とハ彊ハ善道を行の外ハ

○滕文公問曰滕小國也竭力以事大
 國則不得免焉如之何則可

又同て曰く心一といふ力と竭て齊楚へ交を為とも遂ハ禍を
 免ふと云ふと云ふ如何せんや

孟子對曰昔者大王居邠狄人侵之事
 之以皮幣不得免焉事之以犬馬不得
 免焉事之以珠玉不得免焉乃屬其耆
 老而告之曰狄人之所欲者吾土地也
 吾聞之也君子不以其所以養人者害

孟子對テ曰ク昔
 者大王邠ニ居狄
 人之侵ミ去テ岐
 山之下ニ至テ居
 擇之ヲ取リ非ズ
 已トモ得テ不也
 苟ハ善ヲ為シ後
 世子孫必ズ王者
 有ル君子業ヲ
 創統ヲ垂繼可
 也為夫成功ノ若
 ハ則チ天也君
 如ク之ヲ善ト為
 ン

人ニ二字何患乎無君我將去之去邠
踰梁山邕于岐山之下居焉邠人曰仁
人也不可失也從之者如歸市
對て曰く右ふ述し大王ハ狄人動されバ攻侵セしとぞめの程ハ獸の皮幣等を貢物は進物としゝるゝ馬珠玉などおも及べも速に國を吞との体相たり大王より國中の耆老を屬として曰く狄人の望ハ吾土地かうそれ土地ハ百姓を養の元かりその養ともの物の物は就て民百姓を害さると君子者ハもつ小忍む我々も不徳の君なきとして別事あると梁山と踰岐山下へ立ちまゐり然らば邠の百姓ども仁君なり失べうとんとて就從て到との市中の群集のごと
或曰世守也非身之所能爲也效死勿
去又或人の曰く夫國家ハ或ハ天子より賜ヤと先祖合戦死がごとくして創業くらかんバ已む世なりといふ分の心して

自由なりとて然バ討死を爲とも
空^か再^ひと人^{ひと}は臆^{おそ}れをともとていふもいふ
者^{もの}右大王の民を愛さとも此例^{このれい}ふ不然^{さか}先^{せん}祖^その爲^{ため}に私^ひととて
勇^{ゆう}死^しさとも君^{きみ}ニテ条^{じょう}をよりく擇^{えら}行^いべとたり

○天朝を以て論ずるに死を致すとて武道の本意なりと考へ
功名を爲の期ありバ大謀の爲小く思ふより又あり尤考へ
○魯平公將出嬖人臧倉者請曰他日
君出則必命有司所之今乘輿已駕矣
有司未知所之敢請公曰將見孟子曰
何哉君所爲輕身以先於匹夫者以爲
賢乎禮義由賢者出而孟子之後
喪踰前喪君無見焉公曰諾

為平禮義賢者由而出而孟子之後の喪ハ前の喪より踰君見之無公の曰

樂正子入て見て曰く君奚為ぞ孟軻を見不曰或ひと寡人よ告て曰く孟子之後の喪ハ前の喪より踰君見之無公の曰

樂正子孟子に見て曰く克君よ告て曰く克君よ告君來て見んと為壁人臧倉者有て君を沮む君是を以て來と果さ不曰く行或ハ之を止む或ハ之を尼む行

平公魯國の君なり此段曾て樂正子といふ賢人の勸めより平公の曰孟子よ見んと將て出馬ある必壁卒のもの名を臧倉といふ者あり他も君の出駕ハ有司何所之の令あり今乘輿已に加馬矣然亦その所知不恐とさづり敢て請ふ平公の曰く孟子よ見ると賢者といひて身為之を輕しめんとす孟子ハ父の喪事ハ踰絶と見たり前より父の喪事ハ輕し後より母の喪事ハ踰絶平公信なりと諾しぬ

見曰君奚為不見孟軻也曰或告寡人曰孟子之後喪踰前喪是以不往見也曰何哉君所謂踰者前以至於後大夫前以三鼎而後以五鼎與曰否謂

棺槨衣食之美也曰非所謂踰也貧富不同也平公の往らざる故に樂正子よりて奚為孟子母を葬しと問ふと答へて曰く孟子も父の時ハ平士と雖も士の礼より用たり後ハ大夫の位なりと問ふと答へて曰く有る事小なり公の曰く否その事小あらん夫ハ士と大夫の今ある言べきとなく只棺槨や飭衣食は美しきをいふなり正子の曰くそれと踰とを難むと云ふは異なる論なり足る

樂正子見孟子曰克告於君君為來見也壁人有臧倉者沮君君是以不果來也曰行或使之止或尼之行止非人所能也吾之不遇魯侯

天也臧氏之子焉能使予不遇哉

止人の能る所
は非ざる吾魯侯
小遇不ハ天也臧
氏之子焉くんぞ
能予不遇不使人
哉

克ハ正子グ名ナリそのうち正子孟子ヘあのとと語テ曰ク克ダ
告上リ故ニよりて君来テ先生ニ見んとあり一臧氏これを
沮止スル是以来とと果バんと嘆々也孟子喻説クテ曰ク
中くさるの理ハあらん凡人の身吉凶禍福又ハ物の遂と遂
ざるの道ハ天命として定アテて人の力ハ能ざる者ナリ人の行ハ
止まらざる自然とさる不使るのなり吾魯公ハ遇ざる
道の行ハたぬるも魯公の不幸カテ正き道を聞クものなら
ざるなり則ハ是を天命といふ焉臧氏の子の能ハあらんや

孟子卷之二畢

